方丈記私記

堀田善衛

方丈記私記

堀田善衛

方丈記私記

一九七一年七月十日初版第一刷発行
一九七三年三月十五日初版第九刷発行

著者　堀田善衛　©　一九七一

発行者　井上達三

発行所　株式会社　筑摩書房　東京都千代田区神田小川町二一八
電話東京三九二一(代)　振替東京四二三

大日本法令印刷　和田製本　装幀　河野俊二

1095　82034　4604

目

次

一　その中の人、現し心あらむや　三
二　世の乱るゝ瑞相とか　二五
三　羽なければ、空をも飛ぶべからず　五三
四　古京はすでに荒れて、新都はいまだ成らず　六六
五　風のけしきにつひにまけぬる　一〇〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

六　あはれ無益の事かな　一三八

七　世にしたがへば、身くるし　一五九

八　世中にある人と栖と　一六九

九　夫（それ）、三界は只心ひとつなり　一八九

十　阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ　二〇九

方丈記私記

一　その中の人、現し心あらむや

私が以下に語ろうとしていることは、実を言えば、われわれの古典の一つである鴨長明「方丈記」の鑑賞でも、また、解釈、でもない。それは、私の、経験なのだ。

一九四五年、いわゆる〝昭和〟で数えて二十年の三月九日夜、私は友人の、詩人であるK君の疎開先に厄介になっていた。疎開先と言っても、東京以外の地、つまりは田舎でもなんでもなくて、東京は目黒区の洗足であった。元来K君の家は、新橋の貨物駅であった汐留の、貨物の線路と向いあった通りにあり、そこで彼の厳父が運送業を営んでおられ、K君自身もまたその業の手伝いをしているものであった。そうしてこの家の二階は、私たち、まだ少年期をつい昨日あとにしたばかりの詩人たちにとっての、一つのサロンのようなものであった。私はこのことを、K君の、いまはもう亡くなってしまわれた父上や母上への、心からの感謝の心持をもって思い出すものだ。あの惨憺たる戦時を、私たちが、文学的にはきわめて実り多いものとし

て過すことが出来たのは、一つには、汐留貨物駅の近くに、そこへ集って来る青年たちをこまやかな理解と心づかいをもって遇して下さった父母をもった、K君のこの汐留サロンがあったからであった。

ここに集った、あるいは少くとも顔を出したことのある青年たちの名を、思い出すままに、順不同に書きしるしておくとすれば、それは次のような人々である。

鈴木亨、白井浩司、村次郎、福永武彦、芥川比呂志、西垣脩、辻一、武林イヴォンヌ、小山正孝、中村真一郎、加藤周一、野村英夫、田村隆一、鮎川信夫、片山修三、馬淵量司、加藤道夫、那須国男、原田義人、牧章造等々……。彼らのうち、野村英夫、加藤道夫、原田義人、武林イヴォンヌ、牧章造の五人は、すでに故人となってしまっている。そうして今日、生き残った者のすべては、思わぬことに五十歳を越してしまっている。

これはまあ余計なことであったかもしれないが、K君の、この運送屋の二階のことを思い出すについては、やはり彼らのその名をあげないでは、私には、いられなかった。

さてしかし、K君のこの運送屋は、その仕事の性質上、店をたたんで東京を逃げ出してしまうことが出来ず、従って、危険は承知の上でそこにとどまらざるをえず、そこで、K君の厳父が、家族のためにせめて、ということで東京は都内の洗足池の近くに一軒の家を借り、そこを疎開の地としたものであった。またK君一家は、根っからの東京っ子であり、地方にはこれと

言って疎開のためにあてになるところも、つてもなかったもののようであった。

そうして、一九四五年三月と言えば、すでに右にあげた友人たちも召集されているか、それこそ疎開をしているかのどちらかであって、サロンはすでに、とうのむかしに解体をしてしまっていた。中村真一郎君の如きは、海洋気象台（！）に就職をして信州の山の中へ行っていた。海洋気象台に中村君が就職をすること自体、なんとも言えず珍妙なことであったが、それが信州の山の中へ行って何をしていたかと言えば、モナコの王様が書いた海洋学術書の翻訳をやっていた。私は、このあとすぐに、私自身は上海へ行く準備をしていた、と書く筈であるが、戦時中に、人々の身に起ったことのくさぐさは、反面に、なんとも言えず珍妙、あるいは滑稽至極なものを必ずやひめていたものであった。私自身、上海へ行く準備どころか、そこに一つの職があるらしい、とはわかっていても、すでに制空、制海権の喪失によって、行く方途はほとんど閉ざされてしまっていた。それが、実際に私自身上海へ行くことになったのは、まったくの偶然によって一枚の飛行機切符が舞い込み、それこそまったくの偶然に、生れてはじめて飛行機というものに、われと自分を疑いながら乗った、という、ただそれだけのことによって、であった。切符が手に入ったのは三月二十二日のことであり、まるで枯草の、草原のような、反覆爆撃によってすでに廃墟となった羽田飛行場を飛び立ったのは三月二十四日である。準備も何もあったものではなかった。K君の父君から三百円のお金を借りるのが用意としてせいい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

っぱいというものであった。上海までの片道切符の代金は、九十円であった。海軍が商売をするとは妙なものだな、と思った記憶がある。それを、私は日本海軍へ払ったのである。飛行機自体は、海軍が徴用していた朝日新聞社所有のものであった。戦争という厖大な事件は、その巨大なまでに空しい必然性のなかに、無限の偶然性を内包しており、人々がぶつかるその一つ一つの偶然性の総体が、その人、一人一人の場から見ての戦争そのものであったと言えるようなものなのであったかもしれない。そうして、その一つ一つの偶然性は、その人一人一人の生と死にかかわった。

私個人の場合、一度召集をされて内地での訓練期間中に病気になり、三カ月の陸軍病院生活の後に召集を解除され、田舎で療養をし、その前年の半ば頃にふたたび上京をして来ていたものであった。私のいた部隊は、米軍の攻撃直前に、サイパン島補強のために送られ、到着前に輸送船の大半を沈められて全滅をしてしまった。

さてしかし、あまりに私事にわたりすぎるので、この辺のことはこのくらいとしておきたいが——もっともこの文章で、はじめにお断りをしたように、私事以外のことを書くつもりはまったくないのだが——ともあれ、これらのことはこのくらいにしておきたい。

K君の洗足の疎開先で、黒布をかけた電燈の下で、その小さな貧しい光りの輪のなかで、二人でいったい何を話していたものであったか。私に漠然とした記憶がある。K君は建礼門院右

京大夫集はそのままで小説になる、君、やってみないか、というようなことを言い、私は私でボォドレェルの詩は、日本語に訳すよりも、あれは漢詩に訳した方がいい、ナントカカントカでセザルベケンヤ、というふうにした方が、ずっとボォドレェルらしい格調が出る、その方が、ボォドレェルなりの論理が徹ってウジャジャケなくていい、といった、そういうことを言いあっていたという、漠然たる記憶が二十五年後の今日に、ぼんやり残っている。

なぜそれが残っているか。それが、おそらくは、この文章の、主低音になるものであろう。

三月九日、夜十時半、警戒警報が発令された。

いまここに、三月九日、夜十時半、などとしたり顔にドキュメンタリィなことを言うのは、つまりは、いまの私である。二十五年後に、うろうろと生きている私が資料を見て——もはやそれは史料、と言った方がいいかもしれない——である。そうして、その資料とは、東京都が戦後に、あやうく残っていた、警察、消防関係等のあらゆる資料をかきあつめてつくった、「東京都戦災誌」（一九五三年刊）というものである。東京空襲については、内田百閒著「東京焼盡」や、大屋典一著「東京空襲」などのすぐれた記録や、また写真資料としては、影山光洋著「東京大空襲」があるのであるが、ここでは私は東京都の公式記録を使用することにする。

さてその公式記録によれば、三月九日夜十時半、警戒警報発令、ということになっているの

であるが、K君と私とが洗足池に近い彼の家にいた限りにおいては、すでに話の種も尽きかけ、いつ空襲があるかわからぬ状況であったから、眠れるときに眠っておかなければならず、そろそろ寝ようか、と言いあっていたときに、例の、亡者の唸きのような、あるいは喪家の狗の遠吠えのようなサイレンの音がひびきわたり、それがまだ鳴りおわらぬうちに、鈍い、とも、また、金属的に、甲高い、とも、どちらをとってもあたっている筈の爆音が頭上に轟いて来た。音として後者に傾いているとすれば、それは少数機であるか、あるいは単機か、である。

これで眠ることは出来なくなり、二人はぼそぼそと会話をつづけていた。早々と防空壕へ入ったりしても何の役にもたたない。身体がみじめに冷えて来るだけのことである。

公式記録によれば次のようなことになる。

三月十日　九日二二時三〇分警戒警報発令、十日〇時一五分空襲警報発令、それから約二時間半に亘つて空襲が行はれた。来襲機はB29一五〇機と数へられ、単機或は数機づつに分散して低空から波状絨氈爆撃を行つた為、多数の火災が発生して、烈風により合流火災となり東京の約四割を焼き甚大な被害を生じた。

消防庁調査。

①警戒警報発令3月9日22時30分。空襲警報発令10日零時15分。空襲零時8分。空襲警報解除2時37分。警戒警報解除3時20分。

②来襲敵機。B29一五〇機。

③攻撃方法。警戒警報発令と共に、B29敵機帝都に侵入せるも被害なく、房総方面に脱去せるやと見られたる処、突如帝都東方より進入せる敵機一機、見るまに城東方面に焼夷弾を投下、亦、後一機乃至数機を以て低空より連続かつ波状絨氈爆撃を敢行せり。

④投下弾。爆弾一〇〇瓩六個、油脂焼夷弾四五瓩級八五四五個、二・八瓩級一八〇三〇五個、エレクトロン一・七瓩級七四〇個。

⑤気象。天候晴。風位北、風力烈風、湿度五〇%、干潮。

⑥焼失区域、㈠下谷区、浅草区、本所区、城東区、各大部、㈡足立区、神田区、麹町区、日本橋区、本郷区、芝区、荒川区の各半部、㈥向島区、牛込区、小石川区、京橋区、麻布区、赤坂区、葛飾区、滝野川区、世田谷区、豊島区、渋谷区、板橋区、江戸川区の各一部、㈢宮内省内主馬寮本館、伝馬船三〇〇隻、伝馬船一五二、小船二三隻。

⑦焼失程度。一八二〇二六六棟。三七二一〇八世帯、四〇〇〇五〇四坪。

⑧火災発生及延焼状況。単機又は数機に分散し低空より約二時間半に亘り波状的絨氈爆撃を続行せるため前記区域内に多発火災発生、折柄三十米の烈風に煽られて忽ち、合流火災とな

り帝都の約四割を灰燼に帰し死傷者、甚大、一大修羅場を現出せり。
都民の死者七二〇〇〇名、負傷者二一〇〇〇名生ぜり。
⑨官設消防隊の活動。本空襲火災発生するや官設消防隊は左記の如く出場之が防圧に一大敢闘を為したるも如何とも尽し難く、喞筒（ポンプ）車の焼失九三台、手輓瓦斯倫（ガソリン）一五〇台、水管一〇〇〇本、隊員の焼死八五名、行方不明五〇〇名以上に上り、今次空襲下に於ける最大苦闘を為したり。

この消防庁調査によれば、死者合計は七二、一七二名、負傷者は二〇、八九一名、死傷合計九二、八六五名となっていて、被害がもっとも多かったのは、本所区であり、死者二五、〇八五名、負傷者は三、四七七名、合計二八、五六二名である。

また別のある報告は、「各区ニ対シ猛烈ナル焼夷弾攻撃ヲ実施セラレタルニ依リ、折柄ノ北風ニ、三十米ノ烈風ニヨリ発生火災ハ益々熾烈ヲ加ヘ殊ニ浅草区方面ノ火災ハ隅田川ヲ越エ本所区、深川区、城東区、江戸川区方面ノ火災ト合流、其ノ火災愈々猛烈ヲ極メツツアリ。……尚本火災ハ翌前五時一〇分頃漸次鎮火ニ傾キツツアリタリ」、としている。

死傷者については、別の警視庁調査は、死者八八、七九三名、傷者四〇、九一八名とし、合計一二四、七一一名としているのであるが、六日後の帝都防空本部調査によると、三月一六日

一五時現在として、死者七六、〇五六名、負傷者九七、九六一名、合計一七四、〇一七名となっている。

死者の大部分は、真黒に黒焦げになり、ほとんど炭化していたものであった。

さてこの空襲が開始されて、K君と私とは、いざこのあたりにも焼夷弾が投下されたら、一応の消火努力をしてみて、かなわぬということになったら、各個に近くの洗足池の近辺へ逃げようという約束をし、要するに茫然として真赤な夜空を見上げていたにすぎぬ。近くの、田園調布一、二、三丁目、東玉川町、玉川奥沢町などへ投下された焼夷弾は、あたかもトタン屋根を雪が滑り落ちるような、異様に濁った音をたてて落下して来、あるものは落下途中ですでに火を噴出しているものであった。真赤な夜空に、その広範な合流大火災の火に映えて、下腹を銀色に光らせた、空中の巨大な魚類にも似たB29機は、くりかえしまきかえし、超低空を、たちのぼる火焔の只中へとゆっくりと泳ぎ込んで行くかに見上げられ、終始私は、火のなかを泳ぐ鮫か鱶のたぐいの巨魚類を連想していたものであった。憎しみの感情などは、すでにまったくなかった。

たまに火のなかに墜落するものがあっても、喜びの感情も、コン畜生メという気持ちも、私にはまったくなかった。感情の、一種の真空状態、がそこにあった。

たとえば、この前年の、よく晴れ上った秋空を、その空の窮みとでも言いたい高空を、ほと

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com